

令和 2 年 5 月 12 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04840

研究課題名(和文) 柔軟なコンピテンシー・モデルに基づく道德教育の方法の開発

研究課題名(英文) Development of Moral Education Method Based on Flexible Competency Models

研究代表者

吉田 誠 (YOSHIDA, Makoto)

山形大学・地域教育文化学部・教授

研究者番号：60449957

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：道德科のいくつかの内容項目について、それらを実践するために必要な視点や思考を子どもの発達段階を考慮に入れながら段階的に言語化したコンピテンシー・モデルを作成した。作成したコンピテンシー・モデルに基づいて複数回の道德科の授業と学級活動を単元化した授業を構成し、実践、評価、検証することにより、学級目標の達成に向けて子どもの道德性の成長を促す道德科の単元授業を計画、実践、評価する方法を確立することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

道德科の複数授業を通して、子どもたちの道德性の成長を見通した単元授業計画を立て、単元の実践過程で子どもたちの学習成果を評価しながら、ある程度柔軟に各授業のねらいや発問を修正することで、子どもたちの実態に応じて主体的な学習を促す方法が確立されたことにより、今後、道德科の年間指導計画の中に複数の単元授業を組み込みながら年間を通して学級目標の達成に向かうカリキュラム・マネジメントの方法へと発展させる見通しを立てることができた。

研究成果の概要(英文)：For some content items of moral education, we created competency models in which the viewpoints and thoughts necessary for moral practicing were verbalized in stages while considering the developmental stage of the child. Based on the created competency models, the lesson of multiple moral classes and class activities was constructed, practiced, evaluated, and verified to achieve the growth of children's morality toward the achievement of class goals. We were able to establish a method to plan, practice, and evaluate a moral course unit class.

研究分野：道德教育

キーワード：コンピテンシー 道德科 単元授業

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について(報告)』(H28.7.22)では中教審 教育課程企画特別部会の「論点整理」(H27.8)を踏まえて資質・能力の三つの柱と道徳科の関係について整理し、資質・能力を育てる学習を通じて「内面的資質や能力としての道徳性を主体的に養い、日々の生活や将来における道徳的行為や習慣に結び付ける」という特別の教科としての特性を踏まえた質の高い多様な指導を行うことが求められていることから、「今後、道徳科の指導については、その実質化を図るとともに質的転換が求められる」と述べられている。

ここで論じられている「質」とは「内面的資質や能力としての道徳性を主体的に養い、日々の生活や将来における道徳的行為や習慣に結び付ける」ことであろう。道徳科の指導の質的転換が求められる背景には道徳授業で学んだことが日常生活の実践に反映されない指導の形骸化の問題がある。この問題の重要な原因として、習得させるべき知識・技能から指導を構想するコンテンツ・ベースの教育では「行為節の指導にばかり意識を集中し、ややもすれば条件節の指導を軽視してきた」ために知識が「生きて働かない」(奈須正裕、「学習理論から見たコンピテンシー・ベースの学力論」、奈須・久野・齊藤編著『知識基盤社会を生き抜く子どもを育てる』ぎょうせい、2014年、64頁)ことが挙げられる。これは道徳科で言えば、例えば「親切にする」行為のよさを学んだ子どもたちが、実際に困っている人に親切な行動ができるようになるには、困っている人がどんな助けを必要としているか確認あるいは察知するコンピテンシー、および相手を助ける方法や手段を適切に選択できるコンピテンシーなど、関連する複数のコンピテンシーを顕在化、拡充、洗練させ、活用できるよう支援する必要があるにも関わらず、これまで重視されてこなかった、という問題である。

その一方で、現実の問題を解決する視点や考え方、行動の仕方から指導を構想するコンピテンシー・ベースの教育でも、結論としての問題解決策やそこで必要とされるコンピテンシーをこの状況ではこのようにすればよい、といったマニュアル的な捉えで学習させてしまえば道徳的価値の理解とは切り離された方法論の学習となり、しかも日常生活での実践にも部分的、形式的にしか活用されない問題が生じることが予想される。

これまでの道徳科におけるコンピテンシーに関する議論としては、柳沼が問題解決的な学習で育つ資質・能力について道徳的判断力、道徳的心情、道徳的实践意欲と態度、道徳的行動力、道徳的習慣の5つの観点から述べている(柳沼良太、『問題解決的な学習で創る道徳授業 超入門』、明治図書、2016年、22-23頁)が、これは道徳科の文脈の中でのコンテンツ・ベースの資質・能力の議論である。また、田沼は「授業で子どもたちが身に付ける資質・能力を前提に道徳科授業をプランニング」するコンピテンシー・ベースの授業づくりのプロセスを示している(田沼茂紀、『アクティブ・ラーニングの授業展開 小・中学校道徳科』、東洋館出版社、2016年、44-49頁)。しかし、教材選定から指導計画作成のプロセスで挙げられた資質・能力は「生命を尊重する力」などの内容項目すなわちコンテンツに基づいた資質・能力と「問題発見・解決力・問題洞察力」など抽象化されたコンピテンシーが並列されただけで相互のつながりは示されていない。

このようなコンテンツ(道徳科の内容項目)とコンピテンシー(道徳的实践力)のつながりがないという課題を克服するにはコンテンツと汎用的コンピテンシーをつなぐ柔軟なコンピテンシー・モデルを構築する必要がある。コンピテンシー・モデルは、経営学分野において実際の場面での業績や創造性につながると予測される顕在的行動を段階化し、モデル化したものである。モデルの設計方法には、高業績者と普通の業績者のインタビュー調査から高業績者に特有の行動を分析するリサーチベース・アプローチ、組織の目的実現に必要な能力をモデル化する戦略ベース・アプローチ、組織の成員がなりたいた姿を具体的な行動指針とする価値ベース・アプローチの3種類が挙げられる(藤井博、『コンピテンシーモデル論』、JMAM コンピテンシー研究会編『コンピテンシーラーニング』、日本能率協会マネジメントセンター、127-150頁)。本研究では、道徳的实践力は業績による評価がなじまないことから戦略ベース・アプローチと価値ベース・アプローチを複合的に用いることで、コンピテンシー・モデルを固定的なマニュアルではなく自ら常に改善し続けるべきものと捉え、単に各コンピテンシーの最高段階を目指すのではなく、自分なりに状況に応じて各段階を柔軟に使い分けられることを目指す柔軟なコンピテンシー・モデルを教師と子どもたちが協働的に構築するプロセス自体を道徳教育方法として開発する。

道徳科の授業では子どもたちがそれぞれに無意識のうちに萌芽的に備えている道徳に関するコンピテンシーをコンピテンシー・モデルの形で顕在化、拡充、洗練するために現実的な場面の道徳的問題を解決するシミュレーション的活動を行うことを想定している。本来、成熟した大人や人格的に早熟な子どもは自ら経験を通じて学びながら、無意識のうちに柔軟なコンピテンシーを構築し、活用している。授業を通じてコンピテンシーを意識化、言語化させるとともに、周囲の子どもたちとの協働学習を通じてコンピテンシー・モデルの形でより顕在化、拡充、洗練することが柔軟なモデル構築の目的である。道徳科でシミュレーション的にモデル構築を行うことのメリットとして、個人の視点ではなく複数の人々の多様な観点から検討できること、教師と子どもたちの間にコンピテンシーに関する共通言語を持つことで日常生活での指導や互いの成長に向けた支え合いにも活用できることが挙げられる。

2. 研究の目的

研究代表者は新学習指導要領が求める「各教科等の文脈の中で身に付けていく力と、教科横断的に身に付けていく力とを相互に関連付けながら育成」する教育を道徳科において実現するた

め、柔軟なコンピテンシー・モデルに基づく道德教育の方法を開発しながら道德の内容項目全体に関する指導評価用コンピテンシー・モデルを体系化し、カリキュラム・マネジメントに資することを研究の最終目的としている。本研究では道德科のいくつかの内容項目に関する指導評価用コンピテンシー・モデルを構築し、学校現場での授業実践、教師と研究者による事後検討、および教師による子どもの行動観察に基づいてモデルを検証、洗練しながら柔軟なコンピテンシー・モデルに基づく道德教育の方法を開発することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究の方法は大きく分けて コンピテンシー・モデル構築の方法に関する理論研究、教材分析と授業の事後検討に基づく指導評価用コンピテンシー・モデルの構築と修正、道德授業の実践とその後の子どもたちの行動観察を通じた子どもたちのコンピテンシー・モデルの洗練プロセスの検証、の三つの部分から成る。研究代表者は主に と に関わりながら全体を統括した。研究協力者は と を分担した。 と の成果の共有および の検討作業については山形大学附属学校・山形大学教職大学院の現職教員と卒業生から成る山形大学道德教育研究会で月 1 回実施した。

4. 研究成果

2017 年度は親切のコンピテンシー・モデルに基づく道德授業の実践とエピソード評価について日本道德教育学会大会で発表した後、論文として取りまとめ、「資質・能力を意識したカリキュラム・マネジメントに基づく道德科の評価 - コンピテンシー・モデルを用いた複数授業構成とエピソード評価 - 」と題して日本倫理道德教育学会誌に投稿した。また、指導評価用コンピテンシー・モデルについては、「生命尊重」、「ルールとの付き合い」、「マナー」、「正直・誠実」、「友情」、「相互理解・寛容」について構築し、複数のコンピテンシー・モデル相互の関係について検討を行っている。「マナー」のコンピテンシー・モデルについては、小学校3年生の道德授業づくりおよび実践結果の評価に利用した。

2018 年度は、まず複数のコンピテンシー・モデルに共通する視点や思考を検討する過程で自我発達理論における「自己の視点の成長」がコンピテンシー・モデルの成長と関わっているのではないかという仮説に基づいた研究を行った。具体的には学級活動と道德科の単元構成を通して道德性の成長についての見通しに基づく担任の願いと子どもたちの目標とを融合したカリキュラム作りと実践、および評価を行った。その結果、本単元構成による学習を通して子どもたちの自我発達段階が成長するとともに、「相手の立場に立って考える力」の構成要素がある程度明確になり、子どもたちの間でも共有されつつあることが示された。また、「責任」についてのコンピテンシー・モデルを構築するための基礎的研究として、責任概念の歴史的発展過程を能動性と受動性のスペクトラムによる相補的な視点から捉え直すことで責任概念を大きく四つに類型化し、理想主義と現実主義、行為主義と人格主義の二軸平面上に位置づけた。これにより「責任」についての学習の系統化・単元化の可能性を明らかにした。

2019 年度は、コンピテンシー・モデルの段階がスザンヌ・クック＝グロイターの自我発達段階と関連していることから、コンピテンシー・モデルによって道德性の発達段階論に見られるスタンダードに基づく評価とエピソード評価を統合した評価を行う方法について検討を行った。そのため、善悪の判断についてのコンピテンシー・モデルを作成し、学級目標の達成に向けた道德科の単元授業を計画、実施、評価するとともに、授業者にホワイトボード・ミーティングを用いたインタビューを行い、インタビュー結果について修正型グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。さらに、単元授業の計画から実践、事後検討、次の単元授業の構想までの過程全体の考察についてはエピソード評価を用いて考察を深めた。その結果、教師の視点やスタンスを自覚した上で子どもの生き生きとした姿を柔軟なコンピテンシー・モデルと重ねて捉え、そこに見られるズレや違和感を探求し続けることでエピソード評価の妥当性や有効性を担保できる可能性を明らかにした。

以上の研究により、道德科のいくつかの内容項目について、それらを実践するために必要な視点や思考を子どもの発達段階を考慮に入れながら段階的に言語化したコンピテンシー・モデルを作成した。作成したコンピテンシー・モデルに基づいて複数回の道德科の授業と学級活動を単元化した授業を構成し、実践、評価、検証することにより、学級目標の達成に向けて子どもの道德性の成長を促す道德科の単元授業を計画、実践、評価する方法を確立することができた。これにより、今後、道德科の年間指導計画の中に複数の単元授業を組み込みながら年間を通して学級目標の達成に向かうカリキュラム・マネジメントの方法へと発展させる見通しを立てることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 吉田誠・逸見裕輔	4. 巻 338号
2. 論文標題 コンピテンシー・モデルとホワイトボード・ミーティングによるエピソード評価－学級目標達成に向けた道徳科単元学習における指導と評価の一体化の試み－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 道徳と教育	6. 最初と最後の頁 121-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田誠・逸見裕輔	4. 巻 第14号
2. 論文標題 学級目標の達成を目指した学級活動と道徳科の単元構成－コンピテンシーの「垂直的成長」の観点に戻ってエピソード評価－	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山形大学 教職・教育実践研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉田誠	4. 巻 第2号
2. 論文標題 「責任」概念の歴史的発展の視点に基づく類型化－能動性と受動性のスペクトラムによる相補的な捉え－	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 倫理道徳教育研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田誠・逸見裕輔	4. 巻 創刊号
2. 論文標題 資質・能力を意識したカリキュラム・マネジメントに基づく道徳科の評価	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 倫理道徳教育研究	6. 最初と最後の頁 22-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉田誠・逸見裕輔
2. 発表標題 学級目標達成に向けた道徳科単元学習を核とするカリキュラムマネジメント
3. 学会等名 日本道徳教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉田誠・逸見裕輔
2. 発表標題 学級目標に近づくことを目指した学級活動と道徳科の単元構成－コンピテンシーの垂直的成長の観点に基づくエピソード評価－
3. 学会等名 日本道徳教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉田誠・逸見裕輔
2. 発表標題 資質・能力を意識したカリキュラム・マネジメントに基づく道徳科の評価
3. 学会等名 日本道徳教育学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----